

取材のお願い

国際交流基金
JAPAN FOUNDATION

JF

第61回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展日本館（2026）

荒川ナッシュ医による展覧会タイトル決定！

～小説家やファッショニ・ブランドの応援するクラウドファンディング、およびビジネスエグゼクティブ等の発起人チームも始動～

国際交流基金（JF）はこのたび JF がコミッショナーを務める「第61回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展」日本館の代表作家、荒川ナッシュ医が同館で手がける個展タイトルを以下の通り発表します。

日本語タイトル 草の赤ちゃん、月の赤ちゃん

英語名 Grass Babies, Moon Babies

荒川ナッシュ医からのコメント

『来年の日本館では100体以上の赤ちゃん人形が登場します。設立70周年を機に、建築家・吉阪隆正が意識していた庭と建物の「回遊性」に着目して、庭を象徴する「草」、時間や心に関係する「月」をあしらった展覧会のタイトルを選びました。わたしがニューヨークで学生だった時、励まされた、実験的な「草月アートセンター」へのオマージュでもあります。』



イサム・ノグチの《丸山》にて、荒川ナッシュ医。

写真：細川葉子

この件に関するお問い合わせ：

国際交流基金 ブランド推進部 広報課（広報担当：福島、熊倉）

Tel: 03-5369-6075 / Fax: 03-5369-6044

E-mail: press@jpf.go.jp

取材のお願い

荒川ナッシュは、2026年5月のヴェネチア・ビエンナーレ開幕に先駆け、Art Collaboration Kyotoでの新作映像作品の限定上映、クラウドファンディングの立ち上げ、ファッショングラン ANTEPRIMAとのコラボレーションアイテム開発、小説家・原田マハによる荒川ナッシュとその家族を題材とした書き下ろし短編の連載開始など、さまざまな方法で「草の赤ちゃん、月の赤ちゃん」を発信します。

また、荒川ナッシュに共感した、荻野いづみ氏、田中仁氏、福武英明氏、森京子氏、吉野誠一氏などにより、日本館展「草の赤ちゃん、月の赤ちゃん」を応援するコレクターズサークルが発足しました。

「草の赤ちゃん、月の赤ちゃん」は、荒川ナッシュの新しい家族の未来への展望や優しさを軸に、様々な協働者とともに、多様性の価値を伝達します。展示だけではなく、共同キュレーション、クラウドファンディング、イタリア現地コミュニティとの連携など、展示を成功させる仕組みそのものを実験するような試みをしております。来年のヴェネチア・ビエンナーレの開催に向け、継続して貴メディアでとりあげていただきますよう、よろしくお願ひ申し上げます。

■Art Collaboration Kyotoでの新作映像作品の上映

荒川ナッシュは、11月14日から16日までArt Collaboration Kyotoによる協力のもと、新作映像作品の限定上映を行います。本映像は、2024年に国立新美術館で開催された荒川ナッシュの個展「ペインティングス・アー・ポップスターズ」のためにミュージシャンの松任谷由実が書き下ろした新曲「小鳥曜日」にインスピレーションを得て制作されたもので、映像作家・斎藤玲児氏との共作によるものです。映像には荒川ナッシュの双子の赤ちゃんも登場します。

■さまざまなコラボレーションが注目のクラウドファンディング

11月13日には、荒川ナッシュは日本館美術展として初の試みとなるクラウドファンディングを始動、「草の赤ちゃん、月の赤ちゃん」の展示を期待させる多彩な返礼品を用意し、多くの美術ファンが参加できる窓口を開きます。

注目の返礼品のラインナップには、イタリアをはじめ国外でも展開しているファッショングラン ANTEPRIMA（アンテプリマ）の協力による第61回日本館展示オリジナル・バッグ、小説家・原田マハによる荒川ナッシュとその家族を題材とした書き下ろし短編の特別限定本。さらに、実際の「草の赤ちゃん、月の赤ちゃん」展示にも用いられる赤ちゃん人形の里親募集や、日本館で共同制作としてパフォーマンスを発表できる特別な体験型リターンなど、ユニークな企画も構想しています。クラウドファンディング特設サイトは、次のリンクから11月13日より情報を更新します。

<https://artnest.art/vbjapan2026>

■コレクターズサークル発足

クラウドファンディングの始動に先駆け、2026年の日本館展示「草の赤ちゃん、月の赤ちゃん」を応援するコレクターズサークルを荻野いづみ氏、田中仁氏、福武英明氏、森京子氏、吉野誠一氏が発足しています。

発起人代表である荻野いづみ氏は、日本館に選出されたアーティストによる初の試みであるクラウドファンディングについて、以下のコメントを寄せています。

『アートには、国や文化を超えて“問い”を投げかける力があります。その力を未来へつなぐために、私たちは今、新たな挑戦をしています。

この件に関するお問い合わせ :

国際交流基金 ブランド推進部 広報課（広報担当：福島、熊倉）

Tel: 03-5369-6075 / Fax: 03-5369-6044

E-mail: press@jpf.go.jp

取材のお願い

国際交流基金
JAPAN FOUNDATION **JF**

円安の影響による美術輸送費や渡航費、現地での滞在費の高騰など、さまざまな困難がある中でも、日本館は他国に劣らない表現とプログラムを実現しようとしています。ヴェネチア・ビエンナーレは、1895年に始まった世界最古の国際美術展であり、“アートのオリンピック”とも称される、世界中の創造の力が集う舞台です。その日本館が、2026年に設立70年を迎えます。

今回の代表アーティストには荒川ナッシュ医さんを迎え、その挑戦を支えるキュレーターとして高橋瑞木さん、堀川理沙さんが伴走します。三人の創造の力が響き合うこのプロジェクトを、ぜひ多くの方々と共に育てていきたいと思います。美術の枠を越え、民間企業やアートファン、そしてこの想いに共感してくださる皆さまと共に、クラウドファンディングを通して、日本館の新たな一步を支えていただけましたら幸いです。』



日本館での展示コンセプトやモチーフに深く関わる荒川ナッシュの双子。

撮影：荒川ナッシュ医

■ コミッショナーについて

国際交流基金（JF）は「日本の友人をふやし、世界との絆をはぐくむ。」をミッションに、「文化芸術交流」「日本語教育」「日本研究・国際対話」を推進する独立行政法人です。JFは1976年よりヴェネチア・ビエンナーレ日本館展示の主催者／コミッショナーを務めています。

この件に関するお問い合わせ：

国際交流基金 ブランド推進部 広報課（広報担当：福島、熊倉）

Tel: 03-5369-6075 / Fax: 03-5369-6044

E-mail: press@jpf.go.jp

取材のお願い

■ 第61回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展 日本館

展覧会タイトル：「草の赤ちゃん、月の赤ちゃん」

会期：2026年5月9日（土）～11月22日（日）

会場：日本館（ビエンナーレ会場 ジャルディーニ地区内）

作家：荒川ナッシュ医

共同キュレーター：高橋瑞木（CHAT 紡織文化芸術館 館長兼チーフキュレーター）、堀川理沙（シンガポール国立美術館（National Gallery Singapore）シニア・キュレーター兼キュレトリアル＆コレクション部門部長）

主催／コミッショナー：国際交流基金（JF）

特別助成：公益財団法人 石橋財団

■ 基本情報

【第61回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展 全体概要】

会期：2026年5月9日（土）～11月22日（日）

会場：ジャルディーニ地区（Giardini di Castello）、アルセナーレ地区（Arsenale）など

制作：ヴェネチア・ビエンナーレ財団

総合テーマ：In Minor Keys/イン・マイナー・キーズ

なお、ヴェネチア・ビエンナーレ財団は、第61回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展の総合ディレクターとしてコヨ・クオ氏（ツアイツ・アフリカ現代美術館エグゼクティブ・ディレクター／チーフ・キュレーター）を2024年10月に指名し、同氏は準備を始めておりましたが、2025年5月に急逝されました。同財団はコヨ・クオ氏の遺族の協力のもと、同氏の選んだ総合テーマ、コンセプト、専門家とともに、第61回展を開催することを発表しました。詳細は以下のサイトをご参照ください。

<https://www.labbiennale.org/en/news/biennale-arte-2026-minor-keys>

■ ヴェネチア・ビエンナーレ（La Biennale di Venezia）について

ヴェネチア・ビエンナーレは、イタリアの島都市ヴェネチアの市内各所を会場とする芸術の祭典です。1895年に最初の美術展が開かれて以来、130年近い歴史を刻んでいます。近年、世界各地で美術を中心に、国際的な芸術祭が開催されるようになってきていますが、ヴェネチア・ビエンナーレはそれらのモデル・ケースとなった最も著名な存在です。「ビエンナーレ」とは「2年に一度」意味するイタリア語で、同様な芸術祭の多くが「ビエンナーレ」や「トリエンナーレ」（3年に一度）と命名されているのは、ヴェネチア・ビエンナーレに範をとったものとされています。現在、美術展、建築展、音楽祭、映画祭、演劇祭などを独立部門として抱えるようになりましたが、なかでも美術展は、現代の美術の動向を俯瞰できる場として、また国別参加方式を探る数少ない国際展として世界の美術界の注目を集めています。

日本は1952年に初めて公式参加を果たし、1956年に日本館の完成を経て、今日に至るまで毎回参加を継続しています。1976年からはJFが日本館展示を主催し、現在に至ります。日本館の過去の代表作家については日本館公式ウェブサイトをご覧ください。

<https://venezia-biennale-japan.jpf.go.jp>

この件に関するお問い合わせ：

国際交流基金 ブランド推進部 広報課（広報担当：福島、熊倉）

Tel: 03-5369-6075 / Fax: 03-5369-6044

E-mail: press@jpf.go.jp